日新聞　第3種郵便物認可

被災地 若き外科医変えた

11日に想う

震災10年7カ月

東日本大震災に、背中をぐいっと押された。熊本県出身の医師、田上佑輔さん(41)はこの10年、東京と東北を行き来しながら、支えたい人たちに出会い、自分に何ができるかを探してきた。そう、被災地を舞台にしたNHKの朝ドラ「おかえりモネ」の、あの登場人物のように。

■　■

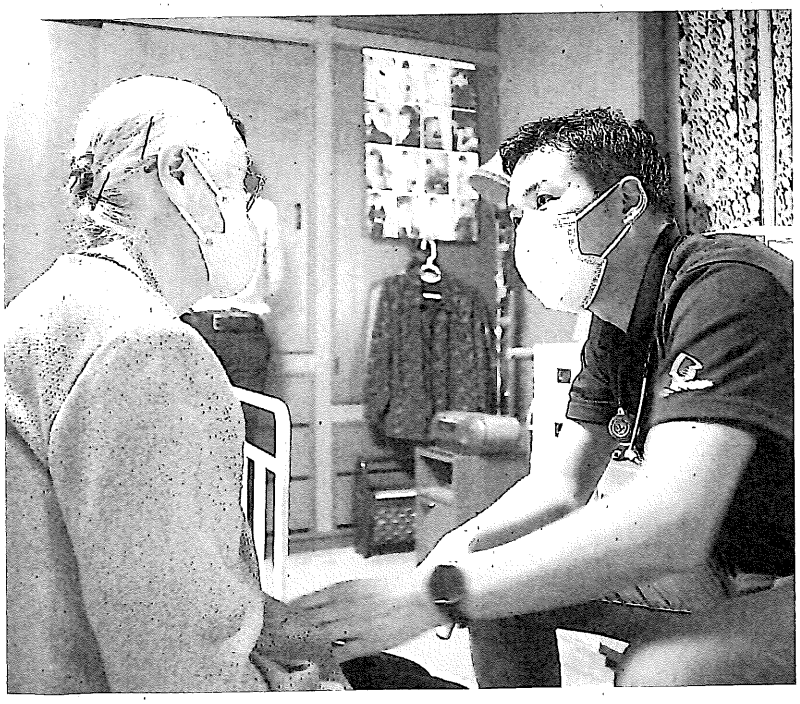
現在は登米市にある「やまと在宅診療所」の院長で、常勤医13人、スタッフ計160人を抱える医療法人の理事長。2011年の震災時は、東大病院の若き外科医だった。

伝わってくる被災地の惨状にいても立ってもいられず、「誰かの役に立ちたい」と、2週間後には南三陸町の避難所にいた。

子どもたちのためにお祭りをしたり、東京の若者に被災地を見せたり。毎月通うう

登米・東京を往復「おかえりモネ」の医師のモデル　田上　佑輔さん(41)

在宅診療 患者の人生と向き合う



患者（左）の自宅で診察をする田上佑輔さん＝登米市、小玉重隆撮影

ち、見えてきたのは地方の医師不足の問題だ。県庁に電話し、どこが一番困っているかを尋ねた。教えられた登米市民病院で、日曜の当直医を交代で引き受けることに。

1年間ほど続けた後の13年4月、同病院の敷地の一角を借りて、在宅診療所を開設した。出会った地元の人たちと一緒に、登米をもっとよくしたいと思った。

東大病院は辞めた。ただ、東京で別の診療所に籍を置き、完全に移り住むことはしなかった。医師がたとえば1週間おきに都市部と地方を循環する。そんな新しい働き方をつくれば、地方に目を向ける医師が増え、ひいては医師不足解消につながると考えたのだ。

わり、傘下の診療所は大崎、栗原、岩手県一関、横浜市などに増えた。田上さんも日曜に登米に来て、木曜に東京の自宅に帰る生活を続ける。

■　■

9月末、登米で田上さんの診療に同行した。

看護師、診療アシスタントとともに車で患者宅を回る。いかにも医者らしい白衣ではなく、ポロシャツ姿。患者の居室で聴診器をあて、体調や悩みを聴き、お年寄りの昔話に耳を傾ける。中には「家で最期を迎えたい」というがん患者もいる。

在宅診療の形にしたのは、たまたまだという。地元の開業医には「東京の医者何する者ぞ」と、冷ややかな目もある。だから競合する外来診療は避けた。

それが、田上さんにとっては大きな「気づき」につながった。

昔、ブラックジャックにあこがれた。東京でがんの手術をこなしていた頃は、切るのが楽しかった。がんがきれいに治れば、「先生のおかげで助かりました」と感謝もされた。

でも、それで本当に患者に向き合うことになるのか。大病院では医師一人一人は内視鏡だけ、オペだけと分業になりがちだ。診察室や手術室で自宅や地域に赴き、暮らしや人生そのものを診て、いかに幸せに生きるか一緒に考える。そんな医療があっていい。

「同じ思いの医師が仲間となり、地域の困りごとを助ける存在が医療機関だ」とも田上さんは考える。医療による、まちづくりへの挑戦――。

■　■

去年の1月、NHKの演出スタッフが「震災のドラマをつくりたい」と訪ねてきて、話をした。後に朝の連ドラと知らされる。「おかえりモネ」のクレジットでは、「医事考証」で田上さんの名前が出てくる。

ドラマで坂口健太郎さん演じる菅波先生は、東京の大学病院で外科医として苦い経験を抱え、登米と往復しながら、地域医療に目を開かされてゆく。一方、ふるさと気仙沼が津波で被災し、自分に何ができるか思い悩む主人公モネを、そっと押す役回りでもある。

その成長ぶりは、震災からの田上さんの足跡に重なるようだ。

「おかえりモネ」の最終回は10月29日。モネと菅波先生たちがどうなるか、結末はまだわからない。

（編集委員・石橋英昭）